

東國館

宗源教大意

生ウマたても死シふても神カミの懐フコロにそらまほく身ミを人ヒトも知ら  
 びやぬと思ひ出でたる其由は人ハ總スベテて天神アスカミに御靈ミタマを  
 依ヨて世ヨに生ナま出デて壽命イノチヲ保タモち世ヨに在アる限カキリを衣食住イシヨクジュを  
 始ハジめ何事ナニカミタチも皆ミナ神等カミタチの恩ミタマノユ頼ヨり依ヨらざるを無ナし又死シ後ノチ  
 は其神等カミタチより高タカくも低ヒキくも位タラシ字ジ賜タマひて長ナガく其神等カミタチ乃ハ  
 部ハに屬ツた從シふ御定ミサダメなるが故ユエなり抑ソノヒトノミ人身ヒトノミハ始ハジ父母フボの交マ  
 通トりし時トキに抵アツて人物ヒトとなる候モトき物實モノサネを母ハハの胎内ハハノウチに寓ヤド  
 居イり給タマふ最初ハジメ天地ツクリナを造化ツクリナして世ヨを開ヒき給タマひし天アメ  
 之ノ御ミ中ナカ主神ヌシノカミの幽カクレに量定ハカリサダメ給タマふ奇クシく妙タマれる御所ミシロ爲ナる也ナリ

譬へぞ。昔大虚空の中に寓<sup>ヤド</sup>て。渾沌たる鷄子の如く  
ある物の後、割<sup>ワカレ</sup>て天地となれる始<sup>ハジメ</sup>に如し。神祇本  
源<sup>ネ</sup>に引る寶山記に。天御中主尊。無宗無上<sup>ムソウムジョウ</sup>而獨能化<sup>ドクニケカ</sup>。故  
曰<sup>イハレ</sup>。天帝之神<sup>テンタイノカミ</sup>。とあるを思ひ合<sup>オモヒアヒ</sup>を添<sup>ソヘ</sup>し。又国土のありし  
次第<sup>シブタヒ</sup>ハ。大道本論<sup>ダウダホノロン</sup>に委<sup>オモ</sup>く去<sup>サレ</sup>ひ置きた社<sup>ヤシ</sup>也。開<sup>ヒラ</sup>て見<sup>ミ</sup>て知  
るべし。

次に母の胎内<sup>マノタマノウチ</sup>に寓<sup>ヤド</sup>てを<sup>シ</sup>ゆ<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>ど。形<sup>カタ</sup>も何<sup>ナニ</sup>も去<sup>サレ</sup>ひが  
よれた物實<sup>モノサネ</sup>を。人物<sup>モノヒト</sup>の形<sup>カタ</sup>に凝<sup>コ</sup>ら<sup>し</sup>結<sup>ムス</sup>ぶ<sup>ま</sup>し給<sup>たま</sup>ふ。高御産  
巢<sup>タカミムスヒノカミ</sup>日神<sup>ヒノカミ</sup>と。神産巢<sup>カミムスヒノカミ</sup>日神<sup>ヒノカミ</sup>と。男女<sup>オノメ</sup>二柱<sup>ニハしらカミ</sup>神<sup>ノカミ</sup>乃<sup>ナリ</sup>幽<sup>カクリ</sup>に量<sup>ハカ</sup>り定<sup>サ</sup>め給<sup>たま</sup>  
ふ。高<sup>タカ</sup>く尊<sup>タラト</sup>き御所<sup>ミヤ</sup>爲<sup>ナ</sup>るなり。

譬へぞ。昔大虚空<sup>オホソラ</sup>の中に寓<sup>ヤド</sup>する鷄子の如くある物の割<sup>ワカ</sup>  
判<sup>レ</sup>て。清<sup>ス</sup>き物實<sup>モノサネ</sup>は。靡<sup>オシ</sup>て天<sup>アメ</sup>とな<sup>り</sup>て。重<sup>オモ</sup>く濁<sup>ニグ</sup>する物實<sup>モノサネ</sup>ハ。跡<sup>アト</sup>  
を殘<sup>ノコ</sup>るを。彼の豊<sup>トヨ</sup>組<sup>グミ</sup>野<sup>ノ</sup>神<sup>ノカミ</sup>に組<sup>グミ</sup>み凝<sup>コ</sup>ら<sup>し</sup>。宇<sup>ウ</sup>比<sup>ヒ</sup>地<sup>チ</sup>迹<sup>アト</sup>神<sup>ノカミ</sup>  
に稚<sup>ウヒ</sup>々<sup>ウヒ</sup>たる溼<sup>ヒダ</sup>る爲<sup>ナ</sup>し。須<sup>ス</sup>比<sup>ヒ</sup>地<sup>チ</sup>迹<sup>アト</sup>神<sup>ノカミ</sup>に砂<sup>スナ</sup>溼<sup>ヒダ</sup>に爲<sup>ナ</sup>し。角<sup>ツノ</sup>杵<sup>ウシ</sup>  
神<sup>ノカミ</sup>と。活<sup>イ</sup>杵<sup>ウシ</sup>神<sup>ノカミ</sup>に其物實<sup>モノサネ</sup>を嚙<sup>クヒ</sup>ちめ<sup>は</sup>け<sup>く</sup>。次第<sup>シブタヒ</sup>に結<sup>ムス</sup>ぶ堅<sup>カタ</sup>め  
整<sup>ト</sup>へて。国土<sup>クニツチ</sup>の形<sup>カタ</sup>に造<sup>ツク</sup>ら<sup>し</sup>給<sup>たま</sup>ひ。序<sup>ツネ</sup>の如<sup>トシ</sup>し。此<sup>コノ</sup>二柱<sup>ニハしら</sup>  
産巢<sup>ムスヒノカミ</sup>日神<sup>ヒノカミ</sup>に。萬<sup>マン</sup>の物實<sup>モノサネ</sup>を凝<sup>コ</sup>ら<sup>し</sup>結<sup>ムス</sup>ぶ爲<sup>ナ</sup>し給<sup>たま</sup>ふ御所<sup>ミヤ</sup>爲<sup>ナ</sup>  
乃<sup>ナリ</sup>序<sup>ツネ</sup>ハ。男神<sup>オノカミ</sup>の御靈<sup>ミタマ</sup>徳<sup>トク</sup>は左<sup>サ</sup>よて廻<sup>マ</sup>り始<sup>ハジ</sup>め。女神<sup>メノカミ</sup>の御靈<sup>ミタマ</sup>  
徳<sup>トク</sup>は右<sup>ミ</sup>よて廻<sup>マ</sup>り始<sup>ハジ</sup>め。高<sup>タカ</sup>御<sup>ミ</sup>産<sup>ムス</sup>巢<sup>ヒノカミ</sup>日<sup>ヒ</sup>神<sup>ノカミ</sup>物<sup>モノ</sup>實<sup>サネ</sup>。左<sup>サ</sup>廻<sup>マ</sup>始<sup>ハジ</sup>如<sup>トシ</sup>此<sup>コノ</sup>  
幾<sup>ヒコ</sup>度<sup>ト</sup>も廻<sup>マ</sup>り合<sup>アヒ</sup>ひあ<sup>は</sup>る。次第<sup>シブタヒ</sup>に御所<sup>ミヤ</sup>爲<sup>ナ</sup>の運<sup>ハ</sup>比<sup>ヒ</sup>重<sup>オモ</sup>て。一

物之形の成整ひたる上を。其大御運むみ様を大抵  
かくの如し。古典より彼伊邪那岐命と伊邪那美命の国  
土を修理給ひし時に。天神の大御教乃まに。男神  
は左より。女神を右とて。天御柱を旋て會て。大八洲に  
国魂神等を生給ふやある。男女交通の初發して。全  
く二柱産巢日神乃大御運の順次ふ效む給ひしなり。  
其も今世に人物に。手足の指先を始め。處々ふ大抵と  
◎如此卷筋の顯きて見ゆ。ハ。本二柱産巢日神の。始  
め人物とある。溢き物實を凝らし結び整へ給ふ時の。  
大御運ふ肖えて。生と出しむるの故あり。顯宗天皇紀

なる月神の御誨ふ。我祖高皇産靈有預鑄造天地之功。  
をある預を主とある神より。亞たる意ある事と論なけ  
と。バ。産巢日神に天之御中主神に附副て。物し給へて  
と。よ。義を包ゆる御誨ふる事は。推て知られり。又  
鑄造を。類聚名義抄り。鑄伊加多。止呂伊呂波字類抄に。  
鑄伊加多。鑄形。四聲字貫に。鑄余封切音容治器法也。徐廣去。  
治器法。謂之鑄。前漢食貨志。治鑄炊炭。註鑄形容也。作錢  
摸也。董仲舒賢良策。上之化。下之從。上猶金之在鑄。下  
をあるの如く。此鑄造ハ。既ふある物實を採て了。鑄ふ  
どの器械に入とて。造る如く。凝らし結び整へ給へる

義なるを以て。彼の産靈其字義ふあらざるをしを知  
ほべし。其物實を出し給ふ神ハ。天之御中主神の高く  
尊き御所爲の外ふあるはくもあらざるなり。拾遺集  
歌。又狭衣物語。むいよの神。伊呂波字類抄。産靈須  
夫乃加美。などあるも。萬物を凝らし結ぶ義ふ係る稱  
て。事實の上ふ能く叶て通えたり。世の俗言ハ。縁を結  
ぶ。糸を結ぶ。草此庵を結ぶ。と云ふ結ぶも。既に某と  
なるはた物實此あるを本として。此と彼やを結び合  
を整へ互力力を合て其物の用を成さしむる態を指  
て。去ふ稱ふる事を知るべし。

次り母の胎内ニ寓する物實の種々しくも人物の形を  
ふさむといへる際ハ。神靈を備給ふも。塊雷産日神の奇く  
妙なる御所爲なり。

よとへば。むろ一国土のふさる時に。神等の御靈徳に  
こして。大八洲国の形を備てある處。彼男女二柱神  
の。国魂神等を生ふして。其国々の靈魂と定て。賦て置  
き給へる序の如く。本萬物此形をふさる始と。神魂の  
備え給へるは。同ト時ふさば。互ふ前後の差別ハあらざ  
をいふも。委しく去ふ時を。其形をふさる體は。則神  
魂を寓いば。造り料の器物ふさる前ハ器物を備へたる

後に神魂を寓らしめ給ふ理なきを。其身體も備たる  
力の盡了生涯も至する時。又を重た病ふどに罹り  
力を疲らし身體を有ち得ざる時。神魂の寓るべき  
器物の破る。故に神魂も寓てがごとく。忽ち身體  
を離れ出て死るを以て。身體は前ふ形をなし。神魂を  
後を備はるとのなきと思ひ知るべし。猶去はる。前ふ  
神地を定めて。次に神殿を營て。其次に神靈を招き鎮  
是前ふ船ありて。次に船玉神の寓て給ひ。前に家あり  
て。次に家神に寓て給ふが如し。此をみれば傍より造化  
せらる。神人あるが故に。無祖とすも造化神の成坐

る序と別ある謂きなり。さてさういふは魂留産日神  
を。決めて。天之御中主神の御靈を。別ふ稱たる御名を  
も。あらじのを思ふに。紀伊国天野祝部の氏文に。天魂  
命とあるを。同神ありと見る時。此天魂の魂を。世に  
生やし活る物に。神魂を授け給ふ。御所爲に依りて。負  
せ奉れる御名あらむも知るべからず。あらかしき。  
次り人の形をなせる身體と。其身體も寓せる神魂とを  
和合せしめて。能く整へよほ上り。母の胎内にありてなご  
らむ。彼五月六月の頃より。動き働くばかりに成り給ふ  
も。生産日神の御所爲なり。

但一此生産日神と。次ふ去ふ足産日神ハ。高御産巢日神と神産巢日神の御所爲比御靈を。別ふ稱よる御名了。いゝららどるや思ふに。舊事本紀ふ。神産巢日神の次。生魂命と序でたるを。神産巢日神の御兒と去ふ事を知らせたるあらむ。姓氏録抄に。恩智神主高魂命兒。伊久魂命之後也。といへば。此ふ從ふ乃外をあらばるふて。

次ふ母の胎内ふありて。動き働くばかていふける人物。此。耳。眼。鼻。口。手足を始々。指の先。髪の毛。至る迄。内も外も。萬至らぬ處なく。悉く満足はし整えし了。即て世に

生也出しむるばありて。成し給ふを。足産日神の御所爲ふて。

高橋氏文ふる景行天皇詔に。大倭国者。以行事負名。国利。といへる如く。上古の神人ハ。御所爲を以て。名ふ負を奉てし例なる中ふも。此神等乃御所爲ふども。幽世の中の幽世の御所爲りて。持ふ奇く妙ふる御靈徳なれむ。見る事も聞く事も叶をぬ故に。其御所爲も漸々不御名りのみ傳をよるも此ふや。されど此五柱は産日神等も。始め人物とふるべき物實を。母の胎内に寓らし了。神魂を備へけり。十月の間ふ萬を足らはし整

えしめて。世ふ生と出えむる迄之持分給ひ。世しある  
限は。神魂の上より身體の上ふ至る迄を。悉く守て給  
ふ神等ふ坐ひ故り。皇孫命の天降坐る時。天神の御  
親ら其御靈を天津神籬に祀む鎮めて。授け給へる。所  
謂神祇官乃入神比中ふ坐ひ五柱神なり。此謂る依て  
朝廷ふも上古より今ふ至る迄。毎年十一月中寅日。  
但し明治の今ふ至る迄。十一月鎮魂祭を執行はし  
の二十三日の夜に改められたり。鎮魂祭を執行はし  
て。壽命の長らむ事を祈奉らば。を見べし。抑造化  
神の既く天地を造らして。神等を生給む。人物を育給  
ひ。其道を立給む。産業を授け給む。次々に蕃息榮え

しめ給ふも何の料ぞとひふ。己命の御心のよふは  
み仕奉らむるの外もあらざるなり。公望私記ふ。凡  
神人皆受上天之命而奉行。其次亦受神人之命而奉行  
也。故竝に訓美擧等とあり。此上天を天之御中主神を指  
奉しふ。以下の神人ハ皆此神の詔命に隨ひて。次々  
に世業を行ふ御掟ふるを見る。漢國より。申示の  
二字を合せて。神といふ字を作れる。神と詔命を下  
して。以下の神人を召使ふ物あるの故あり。玉篇に。示  
カニツ。天曰神。地曰示。人曰鬼。説文曰。示。天垂象。見吉凶  
所以示人也。从二三垂。日月星也。徐曰。一古上字也。左畫

爲日。右畫爲月中爲星也。又去亦神事也。故凡宗廟神祇  
皆从示。禮は説文曰。所以事神致福也。よど見え。形  
亦此外ふ。一字の内は示と去ふ字のそはさる。神事  
に於きて縁ふた字のあらざるを以て按ふ。人を  
一りて。神祇ふ仕奉るを以て。本初勢とふし。其禮法  
も萬事に涉る禮儀の大本となを法き事ハ。何きの因  
もみふ同じ定めふるを見る。大神宮雜事記。長曆  
三年<sup>六</sup>月。荒祭官託宣に。天下四方<sup>カ</sup>人民皆皇大神宮<sup>ス</sup>乃  
御寶也。とあるは。天照大御神を造化神の正統を受繼  
給ひて。世中の御主と坐ひ故ふ。天下の人民を以て御

財とし給ふより。されば其人民ふ必き爲し行そしめ  
給ふ事のあらざる故ふる事を明み知られたる。今世ふ  
人の祖とある者の家門を興て。子孫を撫育ゆる。いも  
成長せし上も。其を召し使て。産業を営み。家を富  
し物を貯へ置て。老の將ふ至らむとさる時を。専ら  
吾ふ孝養を盡さしめ。死し後も。かねて貯へ置ける財  
を以て。吾の神魂の永く住む法た家門を荒ひ事なく。  
能く保ふし。死て。吾を重く祭らしめむとの望り。留ら  
げ。人を只の一人もあらざる。其本ハ何きも造  
化神を分與せらしたる。神魂ある故に。自ら其神慮



を受け継ぎ來る性質の備てあるの故なり。』の仕奉るはた中に。上下遠近の差別ありて。御代御代の天皇ハ世の始とて造化神。所謂皇祖天神の正統を坐て。君職を受繼給む顯世の御主とせば。皇祖天神の祭主となりて。近く仕奉はく。天下に人民を悉く誘ひ導きて遠く仕奉らしむる御職あり。古語拾遺平野神社よて出たる古本。以。夫尊祖敬宗。禮教所先。去々。然則天御中主神天照大神者。惟祖惟宗。尊無二焉。自餘諸神者。乃子。乃臣。孰能敢抗ともあり。又順德天皇の禁秘御抄始に。凡禁中作法先神事後佗事。且暮敬神之。慮無懈怠。白地アカラサマニモテ以神宮

竝内侍所方。不爲御跡。萬物隨出來。必先置臺盤所。棚召女房被奉。をある如く。朝廷にてハ。何事をりし神事を最初に執行し給ふは。君職の大本ありて。是にて重た事を阿らざる故なり。又後佗事とも。即ち天下の人民を治め給ふ御政事を指給へる此外はあらばとへども。此も神事成爲し行をむ料も屬きたる。雜事とも去ふべき物なれば。神事の後物し給ふ事ともありて。又神宮ハ。伊勢の大宮を申し。内侍所を。宮中の賢所なりて。ともに天照大御神に坐し處なれば。假初もも大御足をば向け給ふ也。朝夕も畏み敬む奉りて。其年

の新物を更ふも去はふ。何物もても珍た物ハ。最初ふ  
奉らふもせふて。天皇の天下ハ人民を撫育して。産業  
成<sup>ス</sup>勸<sup>メ</sup>給<sup>ヒ</sup>。国家ヲ富<sup>シ</sup>。物を貯へし給ふ也。去<sup>ヒ</sup>も  
て往<sup>ケ</sup>バ。皇祖天神の祭祀成<sup>ス</sup>嚴<sup>ク</sup>ふ爲<sup>シ</sup>行<sup>ヒ</sup>給<sup>ヒ</sup>む料<sup>ト</sup>  
也。年々ふ調<sup>シ</sup>物ヲ奉<sup>ラ</sup>しめ。其荷<sup>ノ</sup>前<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>。安<sup>ヤ</sup>幣<sup>ヒ</sup>帛<sup>ヲ</sup>の足<sup>ク</sup>  
幣<sup>ヒ</sup>帛<sup>ヲ</sup>と備へ奉<sup>マ</sup>て。孝敬の實を盡し給ふ御料の外ハ  
あ<sup>ラ</sup>ず。其殘を以<sup>テ</sup>御親<sup>ニ</sup>らも聞<sup>ク</sup>食<sup>シ</sup>。百官も賜<sup>ヒ</sup>。又  
国用も充<sup>テ</sup>給<sup>ヒ</sup>むて。年々産業をき<sup>ク</sup>給<sup>ヒ</sup>め。民も利<sup>キ</sup>  
を得しめ給<sup>ヒ</sup>を見<sup>ル</sup>べし。又天下ハ人民も遠<sup>ク</sup>ハ皇  
祖天神の御爲。近くハ天皇の御爲。世も生<sup>キ</sup>出<sup>シ</sup>給<sup>ヒ</sup>

ある物なれば。常に能く天皇も服<sup>ヒ</sup>仕奉<sup>テ</sup>。年月も産<sup>シ</sup>  
業<sup>ヲ</sup>を管<sup>リ</sup>み給<sup>ヒ</sup>。租税を奉<sup>ヒ</sup>給<sup>ヒ</sup>たむし。其正統ヲ受<sup>ケ</sup>  
繼<sup>ギ</sup>て祭主と坐<sup>ヒ</sup>。天皇を以<sup>テ</sup>。皇祖天神も及<sup>ビ</sup>し奉<sup>ル</sup>  
るべた道理あり。されど吾も惟神の大道を。造化神の  
御子、神を撫育せ給<sup>ヒ</sup>。其御子神の忠實も仕奉<sup>シ</sup>。大御  
親子の事實は聞<sup>ク</sup>起原して。後も支別の出來て蕃<sup>ク</sup>息<sup>ハ</sup>  
てし上<sup>リ</sup>君臣の大義ハ立<sup>シ</sup>ものなり。然るを後も立  
し君臣の大義を先として重<sup>ミ</sup>みし。最初も起<sup>テ</sup>し親子  
の義を次として輕<sup>ム</sup>めし。何<sup>カ</sup>も去<sup>リ</sup>も。造化神の正  
統たる天皇を以<sup>テ</sup>永世の君と定め。支別ある神人を

以て永世の臣下と定め給ふる故に。天皇と庶人との本末の差別を立ちしものなり。姓氏録に。皇別。神別。諸蕃の三體を立ちたる上。支別の例をも別て。互に其輕重を明らるせられし外。何れらざるなり。是を以て。上は效ふ下とある人ふしあはば。各も各ぬ。身の本。家比本を。先祖代々を重みし。齋き祭て仕奉るは。料ふ。其家門を授けられてあるは。何の爲ぞと去ふ謂ふを。又産業を管みて財寶を貯へむを。はも。先祖の靈舎る其家を麗しく保存して。年々に祭祀を行ふ幣物を作り料なり。其殘を以て萬の費

用ふも充行ふを。翌る年の祭祀の用度を催はば。料ふる事を能く思ひ知るべき事なり。諸上は去へる神祇官の入神は。上は五神の外は。大官賣神。御膳神。事代主神は。三神も坐て。さへ入神なれど。此三神は。上五神の産日神等の御前。屬從に侍ひ坐る神等なり。其大官賣神を。常に殿内。在て。後世の内侍。比如何神代の始より侍ひ坐り神なり。御膳神を。朝御膳。夕御膳。此事を司り給ふ神なり。事代主神は。姓氏録抄に載たる。天辭代主神より。常に事を知て。道を辨へて。御前の政事を取持給ふ神なり。されば天上より。天照大御

神比御前ハ。大宮賣神アマノモモヒカネを天思兼神の顯御身アノミカネ了て侍ひ給む。伊勢ハ坐ハ御靈の御前ハ。天思兼神と天手力男神の御靈の侍ハ給む。御膳神ハを。豐宇氣比賣神の侍ハひ坐るハの如く。何ハ坐ハ相殿侍坐の神ハ坐ハおハ主ハと坐ハ神等ハをハあハらハざるハなり。但右三神の事ハにハおハきてハハ。既ハふ先年上木せし大道本論ハ去へは説ハを誤ハふハせハバ。此條を以て補ハふハ法ハし。見む人其心を得てハかハし。

故人と成るべた物の始て母の胎内ハ寓ハる時ハに。神の授け給ふ神魂ハを。所謂幽世ハに屬ハて。直ハある物なれば。善ハも無ハく。惡ハも無ハく。純ハ粹ハある神魂ハなて。世ハふ生れ出たる上ハハ。物

ふ觸ハ事ハに抵ハるハよ初ハよて。神魂の活機ハより凝ハりて坐ハる物を指て。心を去ハふなり。神魂ハ頂ハあり。其心ハ欲ハひるハはふハく。活動ハのさまハふ依て。善心ハとも惡心ハとも變ハてて。善行ハをも惡行ハをハ爲ハし行ハふものハなて。其善行ハを爲ハしハのたハく。惡行ハを爲ハし安ハきやうハふ成て行ハくをハ慾ハ心ハを覆ハれて。全ハく世ハふ生ハき出たる。本の謂ハを忘ハれ。眼前の利ハに溺ハるハの故ハなて。

此事の種ハと坐ハる大本を尋ハねれば。幽世ハに在ハる神等の御上ハふも。善神ハあり。惡神ハあり。尊ハたハあり。卑ハまあり。其惡ハく卑ハき物ハを。皆ハ善ハく尊ハたハもハひハく變化ハより起ハてて

なせる物なれど。善神ハ高く尊くして本きて。惡神ハ  
低く卑くして末きて。顯世ウツシヨに在る人も専ら此と同じ  
理なり。世の始よりは。神等カミタチ魂等タマドモのありて。互カミミに類屬  
を率く故に。然る方み心を奪はれて。其類屬の如くも  
あり。又此方より彼方より媚び諂む。好みて寄つくと  
の二ありの故に。行ひも彼が好むか。よ隨ふものなり。  
扶桑略記稱徳天皇條。宇佐宮託宣ふ。夫神有大少好惡  
也。善神、惡、淫祀、貪神、受邪幣。とあり如く。互に好む處の  
差別あるを見るべし。先哲に譬ふ。人ハ人形の如く。神  
も人形を使ふ人の如し。と去へるハ。諾ふる事なり。の

し。

常も世の爲人比爲ふ。善行を爲し行ふ人の神魂也。自ら  
位高く尊ら神等の部カに屬たて。互に魂氣の通へる故に。  
死し時乃神魂も期キ有るの如く。直ふ其部カに赴オモくなて。其  
部カよりは。疾く呼び迎へて。其神魂の分限ホドに依て。高くも  
低くも位を定らたて。長く其部カに屬ツま從をしめ給む。  
又常に世より人を傷ソナひて惡行を爲し行ふ人の神魂  
也。おのづから位低く卑き惡神の部カに屬て互に魂氣の  
通へる故に。死し時比神魂も期キあるが如く。直ふ其部カ  
に赴オモくなて。其部カよりは。疾く呼び迎へて。其神魂の分限ホドに

依りて。其部の内ふて。高くも低くも位を定めらきて。長  
く其部不屬き従ハしむるに於む。

さほち。昔も今も常に佛菩薩不媚び諂むるありし人  
の。死シする時ふ。其神魂カミ比。直に寺院ふどふ往くまとな  
多くありふ。顯世ウツミヨうありし時の行い縁と成るふ因る  
の故あり。

總て死し後ふ。神魂カミの分屬も。顯世ウツミヨの行いふ隨ひて。善惡  
の二分あり。其惡神ふ心を奪をたり。惡行を爲し行ひつ  
つ。露ツユ程ハカリも心執ツクのま。世ふ人ぶろひ居る位昇ノボた人を教諭  
して。其心を翻ヒガし。善神の心に協カキふべく誘イサひ導ミタき置マて。

死する時の神魂カミをして。高き位を授けしむるを。皇神等  
の親オヤく仕奉ツクれる。吾ウの教導職の勢とまをハ去イふ法ホウを托トク。  
幽世カミを主ホネとして。人の世ふ生ナま出る本の謂を明ふし。  
各其勤むべたを知らしめ。其勤むるふ依て。死する時  
に。神魂カミの階級カク。善惡の分屬の差異を。專マコトふ教諭カクさむふ  
ハ。現在眼前の事どもち。去イをびとも自ら悟サトり得らる  
法ホウきを以て。教導の常とまを事ハ。吾ウの大御國オホミクニみみ形  
らバ。萬國ともみ皆然ナリ。是則現在目前を專マコトふを。行  
政官吏と分掌して。此職を別ワ立タて置マる。由縁ユヅルなを。  
如此カ善惡互ニ以テ徒ヒを率ヒく。神等の本府ホノといはハ幽世カミハ。何處イツク

けり。とつふ。天神の本府といはる幽世は。天上より  
 是。国神乃本府とまゝる幽世也。此国土よあてて。何れも上  
 下尊卑の階級多し。高橋氏文及續紀宣命等に。天坐神。  
 国坐神といはるまじり。ふ。大祓詞。天津神。天磐  
 門。押披。天之八重雲。伊豆。乃千別。千別。所聞食  
 武。国津神。波。高山之末。短山之末。上坐。高山之伊穗理。  
 短山之伊穗理。撥別。所聞食。とある如く。天津神の  
 御在所。天上を本とし給ふ故。天上よ在りて所聞食  
 給む。国津神の御在所。此国土を常と給ふ故。此国  
 土よ在りて。所聞食給ふを見る。然し。

但し用ひりて。天地互ふ相通ふ事もある。其事の濟  
 むたる上。本の在所よ歸る例あるを以て知るべし。  
 此国津神は幽世也。人の世界外。堺を隔て。さる国  
 土のありと去ふよ非ぞ。即人の世界は中。以て雜て  
 は。幽世と顯世との差別ありて。窺ひ見る事の  
 叶をぬ故。別けり。世界のあり如くれば。神  
 人との差別を知らざる。故あり。古事記の始。隱  
 身也。大倭本記。身藏矣。ふ。とあり如く。高く尊神等  
 を。幽世の中よ。殊。更。高。く。深。く。位。を。定。め。給。へ。と。バ。  
 同じ神等とつ。牙。ども。賤。き。神。等。の。方。を。り。と。尊。は。神。は。

大御姿を見奉る事も。御言を問ひ奉る事も叶をぬ故  
に。其大御心を窺ひ奉らむ料み。神代の始とて。大占の  
ト事と云ふ奇術を以て御心を問ひ奉りしなり。又位  
低く卑れた神等ハ。幽世に低く浅く。顯世に近く位を定  
先給へれば。時として。御所爲の現きて。見とめらる  
る事のありを以て思ふ。惡神此部ハ幽世ハ同じ幽  
世ながら其屬く處低く浅くして。位劣りて人よ近き  
理をも推して知る能はず。但し顯世の人も上下尊卑の階  
級ありて。各等しからばと雖も。卑れた人の肉眼を以て。  
尊き人の姿此際やゝ見とめらるるを。あゞ一斑の

顯世より。僅に百年をも超ぐべし。壽命を有てる人の  
世界より。位の等差も遙く劣りてあり。故に。所謂不老  
不死の幽世を別ある謂はれり。

人々此国土より生れ出で。此国土を常の在所。所謂本籍と  
して住居をるものより。もとへバ今世の國。神なき。死  
せる時の神魂の所在も此国土の外に在る事なし。

但し世より古今の事實を捨て。善行の人ハ神魂を天  
國より迎へ昇せらる。高き位を賜りて。長き樂を授け  
られ。又惡行の人ハ神魂ハ。彼夜見國所謂月國より逐オヒオトげられ。  
長き苦を與へらる。よぞ云ふ類もあらず。此ハ愚俗



を導く料の方便に出で。善惡の所屬を天地懸隔に設  
出で。天国に榮を羨み望ましむる。外教の所謂天堂地  
獄の説を偷み。或を此国土に屬ける大虚空を飛び翔  
る。或は神魂を指して。訴をぐしく去へる。中昔の歌  
詞字。其儘に採とる。僻説なれば。聞誤して。誑けり。事  
勿る也。

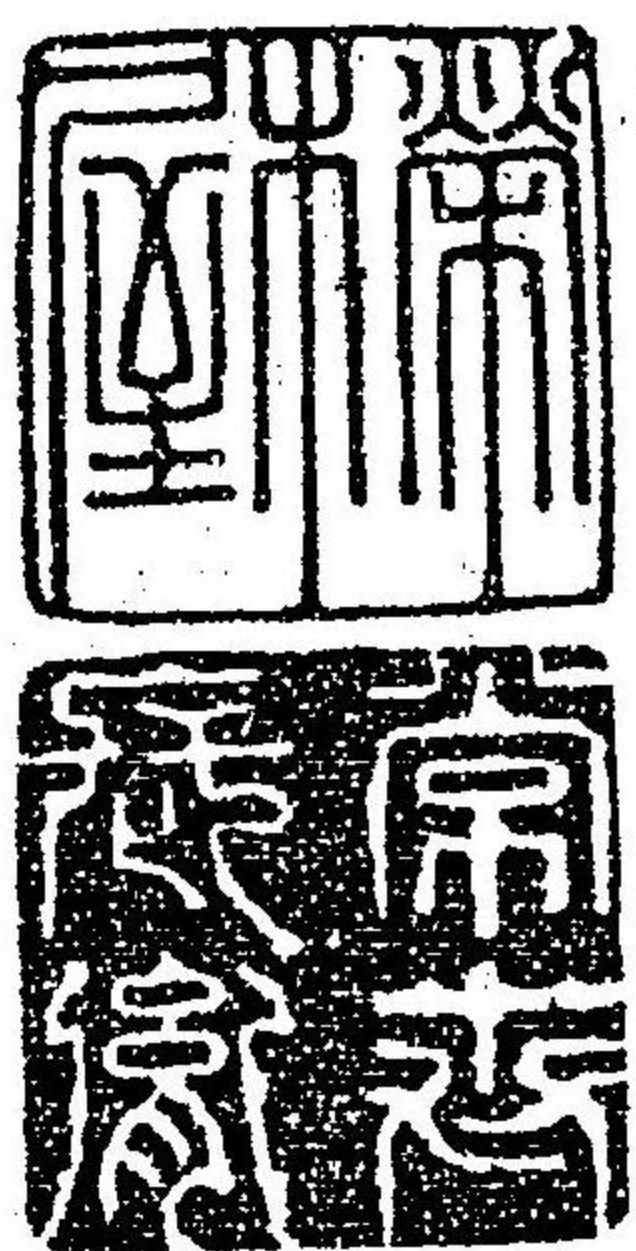
如此にぞ。神の御国に神の御裔と生れ出ある人種を。常  
に大倭心を太く嚴めしく鎮え堅めて。異しき説。惡しき  
教。相率て相口會ふ事なく。彼の惡神に部を誘ははる  
事なく。一向に世の爲人。爲と爲る。是は善事を行む盡

して。神魂の位を高く昇るべく進免置き。年老時至て。  
死し後の神魂を。疾く家の靈舎に鎮め。世に靈幸ふ神等  
の部に從ひ。皇大御国に眞道を天下に敷き播らし。吾の  
子孫の榮を助け守り。其子孫等。遠く長く齋き祭  
らしめむと。思ひ定めてあるを。去れ。倭心の人を去る  
は。是。

此一卷を。大道本論。小汀之論。葬祭祝詞集之解ふとい。  
徴を引き去へる事の大抵を取らべて。簡易哉。專に  
して物したまは。考証がど。委しき事どもを。本編に  
およて見るは。是。

明治十五年十月

權中教正常世長胤



明治十六年一月十九日板權免許

定價貳拾錢

東京裏神保町四番地

平民

著述兼出版人

常世長胤

內藤存守書

木邨嘉平刻

常世長胤著述目錄

榮木廼舍藏版

○每朝神拜祝詞 <small>小折本</small> 一帖 <small>成刻</small>	○每朝神拜祝詞講義 一卷
○木匠祝詞 <small>小折本</small> 一帖 <small>成刻</small>	○木匠祝詞講義 二卷
○臨時祝詞 <small>小折本</small> 一之卷 <small>成刻</small>	○臨時祝詞 <small>小折本</small> 二之卷
○祝詞譜考定 一卷	○玉之緒結 一卷
○上等葬祭圖式 一卷 <small>成刻</small>	○葬祭祝詞集 <small>小折本</small> 一卷 <small>成刻</small>
○葬祭祝詞集之解 三卷	○大道本論 一卷 <small>成刻</small>
○小汀之論 一卷 <small>成刻</small>	○宗源教大意 一卷 <small>成刻</small>
○榮木舍祝詞集 三卷	○學神考 一卷
○宣敎使詔書註解 一卷	○神事宗源傳 五卷
○神祇官沿革物語 一卷	○大敎院鎮座次第記 一卷
○大敎院沿革物語 二卷	○羽前國古蹟實見記 二卷

○著述書目

○一丁

○校正和名類聚抄註廿卷  
○新撰姓氏錄校註七卷

○壬生故事考 一卷  
○神名式考註凡四十卷

○官國幣社祭神考証二卷

○榮木葉の露卷數未定

西京室町通御池下町

池村久兵衛

東京小傳馬町三丁目馬屋新道

吉岡十次郎

同 芝官本町

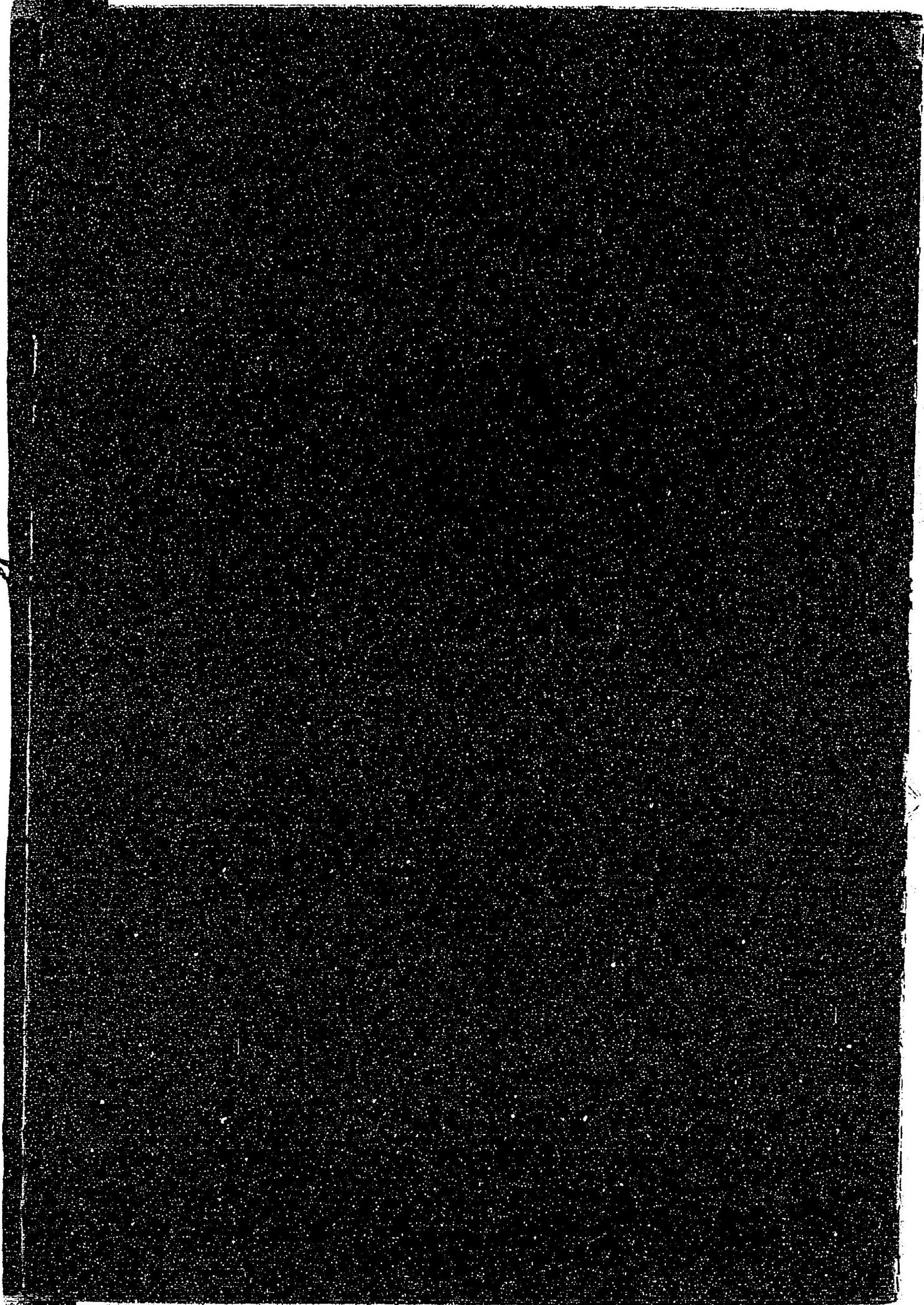
山中市兵衛

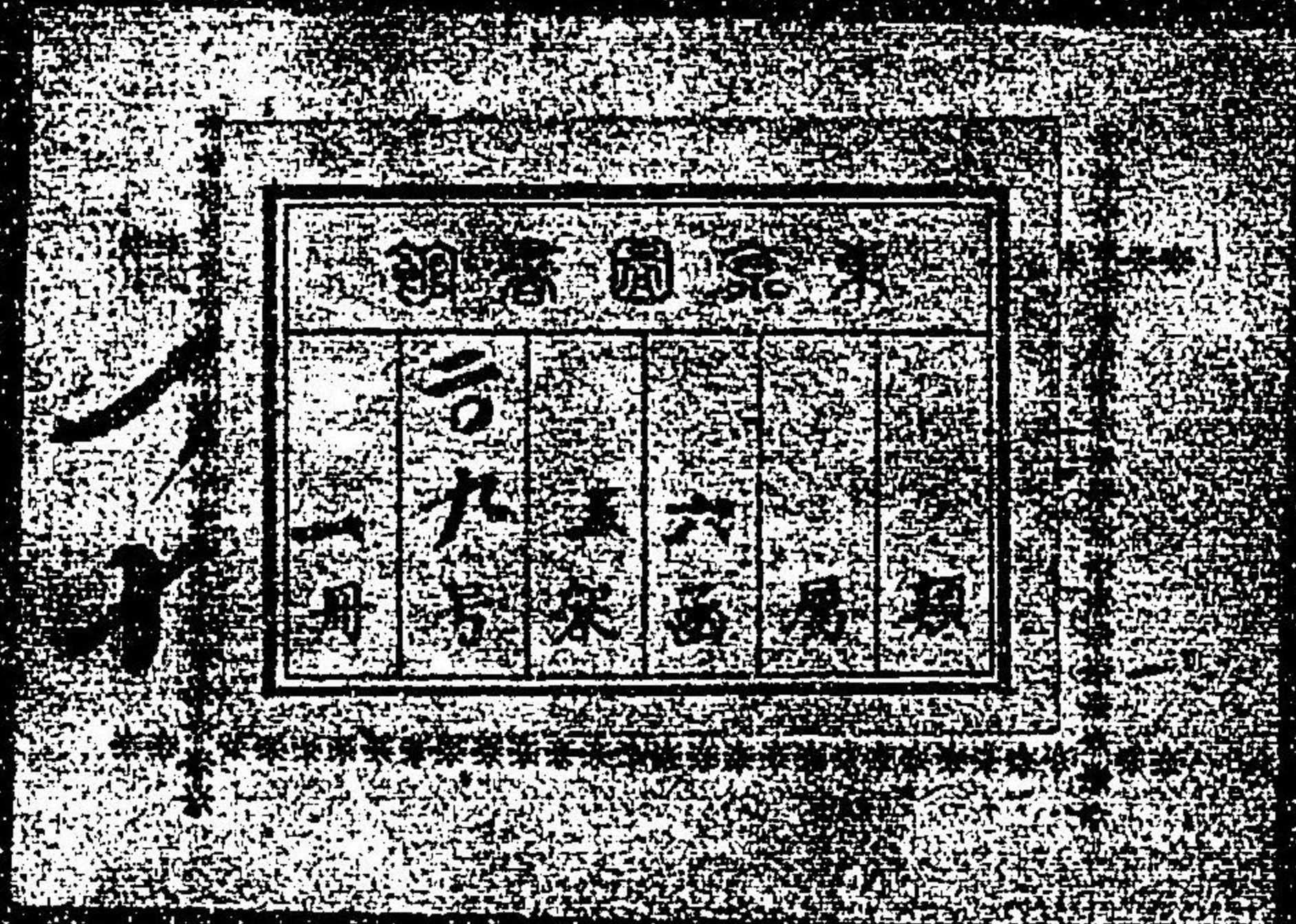
同 日本橋通四町目

中村佐助

發兌書肆

此外羽前羽後各神宮教會所





019654-000-9

6-209

宗源教大意

常世 長胤/著

M16.1

ABG-0443



